



Title	色彩語redを含む強意直喩表現の分析 : red as blood / fire / roseの比較
Author(s)	竹森, ありさ
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 79-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91583
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

色彩語 *red* を含む強意直喩表現の分析

—*red as blood / fire / rose* の比較—

竹森ありさ

1. はじめに

本稿は *red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の 3 つの強意直喩表現を分析するものである。筆者は竹森(2022)において、*white* を含む強意直喩表現—*white as snow*, *white as a sheet*, *white as marble*—を比較し、それぞれの直喩表現の叙述対象に着目した上で考察を行った。どのような事物が叙述対象となるかはそれぞれの *white as N* のフレーズで差が見られ、どのように現在の意味が定着していったのかという点について分析した。本稿でも同様の手法を取り、*red* を形容詞にとる 3 つの強意直喩表現の使用傾向を明らかにする。

強意直喩表現(intensifying simile) は、基本的に [(as) adj. as N] という形式をもっており、形容詞が示す性質の程度を高める proverbial な表現である。最初の *as* はしばしば省略されることがある。

(1)は強意直喩表現の例である。

- (1) a. good as gold
- b. free as a bird
- c. cool as a cucumber
- d. red as blood

強意直喩表現には多様な形容詞、多様な喩辞が現れる。本稿では(1d)の *red as blood* に加え、*red as fire*, *red as rose*—すなわち、形容詞は共通しているが *as* に続く名詞が異なる 3 つの直喩を研究対象とする。名詞部分を様々に入れ換えることができるのは、強意直喩表現の特徴の一つである。強意直喩表現の中心的な意味は形容詞であるため、これらは基本的には全て「真っ赤」の意味をもつが、名詞が換わることで直喩の使用傾向は異なる。竹森(2022)では、*white as snow*, *white as a sheet*, *white as marble* の 3 つを比較し、*white as snow* の叙述対象は、顔や衣服、動物など多様であること、*white as a sheet* は 18 世紀ごろから顔面蒼白の文脈に使われ、それが現代に定着していったこと、*white as marble* は美しいもの・青白いものの両方に使える点とその理由を指摘した。強意直喩表現がそれぞれどのように使用されているか、そして *as* に続く名詞がどのように文化の中で捉えられているかを明らかにするのが本稿の目的である。どのような文脈において使用される直喩であるのか、そしてなぜその叙述対象であるのかを詳細に検討する。

以下、2 節で先行研究を紹介し、3 節で研究方法を説明する。4 節で強意直喩表現のデータを示し、使用傾向を指摘した上で、5 節でその考察を行う。6 節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

[(as) adj. as N] の形式をもつ直喩は、Svartengren(1918)で「強意直喩表現(intensifying simile)」と呼称されている。この形式の直喩には 'intensifying similes' の他に、'stock similes' (Norrick1986)、'as-similes' (Moon2008)、'closed similes' (Tartakovsky et al.2019) などがある。また、本稿では、“Her cheeks are red as blood.” の “her cheeks” にあたる形容詞の叙述対象である名詞(句)を N1 あるいは tenor(趣意)、*adj. as* に続く二つ目の名詞(句) “blood” を N2 あるいは vehicle(媒体)と呼ぶ。

本稿では、共通した形容詞をもち、異なる N2 が使われる直喩表現を扱うが、一つの形容詞に異なる N2 が連なる場合の意味について Norrick(1986)が触れている。例えば “*Black as night*, *Black as soot*, *Black as the devil*” などは、それぞれの含意(connotation) があることを指摘している(1986: 42)。また、N2 によっては含意が生じない強意直喩もあると述べているが(1986:47)、なぜ含意を付加しない N2 があるのかは論じられていないため、個々の N2 の認識について議論が十分でない。意味が把握しにくい直喩(e.g., “*black as a building*”)を Tartakovsky et al.(2019)は扱っており、機能と目的について考察しているが、慣用化したものと新奇性の高い直喩を区別して分析していない。強意直喩表現は慣用化したものが含まれるため、使用されるうちに意味が把握しにくくなった直喩が存在する。例えば *black as one's hat* は、現代において帽子は様々な色の生地によって作られるため、*hat* と *black* につながりがなく見える。これはフォーマルな帽子の色が黒だったため

に生まれたフレーズである¹が、現代の英語話者はその知識を有していない。こういった点を踏まえると、歴史的視点が分析に必要と言えるだろう。

また、強意直喩表現は文学作品に多用される傾向が見られ、Svartengren(1918)、Moon(2008)、菊地(2022)などが指摘している。直喩の機能について菊地(2022)は、文学作品の内容は読者にとって初見であり共有されていないため、「誰もが想像できるイメージを用いて送り手の意図と受け手の解釈のズレを小さくする」と論じている。N2に誰もが想起できるイメージがあるという点については、Norrick(1986)が、N2はその言語話者の間でよく認識されているものであると指摘している(1986:40)。

先行研究は、N2あるいはadj.とN2のつながりに注目されているという共通点がある。N2は含意を与える機能があるが、含意がない、あるいは意味がつかみづらい直喩は、慣用化の影響が考えられる。繰り返し使用されたことによってN2の認識が変化していることを考慮に入れなければいけない。N2がどのように捉えられているかを明らかにするには、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose*の3つの強意直喩表現が何を叙述対象とするか、つまり、N1も合わせて見る必要があると言える。N2が伝達する含意についても、N2で表される事物が文化的にどう扱われてきたかに注意した上での考察が必要である。以上の問題点を踏まえ、次節で研究方法を説明する。

3. 研究方法

本節では、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose*の使用傾向の比較方法を述べる。

強意直喩には慣用化したものが多い。後述するように、本稿での分析対象である3つの強意直喩も、英語史の中では古くからある表現と言える。歴史的な視点が分析に必要であるため、異なる時代のデータを比較する。

用例を採取したコーパス及びデータベースはイギリス英語を扱ったものであり、表1に示した。本稿では19世紀以降のデータと、Early English Books Online(EEBO)でのデータとを比較する。19世紀以降の用例については、強意直喩表現は文学作品に用いられる傾向が強い(Svartengren 1918、Moon 2008)ため、小説を扱ったHUM19UKやBritish National Corpus(BNC)のFiction部分から採集した。これらのコーパスから得られた3つの直喩表現の用例数は6例以下と非常に少ないため、HUM19UKとBNCに加えて、Google Booksから例を集めた。Google Booksでは1800年代~1890年代に時代を限定して検索している²。

表1 本研究使用のコーパス・データベース

コーパス・データベース名	時代	ジャンル	総語数
British National Corpus (BNC)	1980年代~1990年代	Spoken/Written	S:約1000万 W:約9000万 FIC:約1600万
The Huddersfield, Utrecht, Middelburg corpus of 19th century British fiction (HUM19UK)	1800年代~1890年代	小説のみ	約1300万
Early English Books Online (EEBO ³)	1470年代~1690年代	Written	約7億語 約25,000巻
Google Books	1800年代~1890年代	Written	- ⁴

¹ The Oxford English Dictionary の名詞 hat の項目を参照。P6. (as) black as one's (also a) hat: of a deep black colour; completely black. With reference to the usual colour of formal hats (e.g. top hats, bowler hats, etc.).

² Google Books の用例は British English に限定して検索した。Google Books での書誌情報はデータをスキャンした施設の所在地に基づいている場合があるので、著者の出身地を確認した上で、イギリス英語の書籍と判断した。

³ EEBO には異綴が含まれるため、red のスペルは rede, redd, reed, reede, rid, reade, redde を検索している。また、EEBO で複数の版が収録されているために内容が重複したものは計上していない。

⁴ 正確な冊数を Google Books は公表していないため全体のサイズは不明である。

データベース・コーパスから用例を検索し、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の3つの直喩のN1が何か、また、文脈(どのような状況で使用されているか)を明らかにし、使用特徴を整理する。また、直喩の意味や叙述対象には時代を通じて変化があるのか、変化しているならばどのような要因が関わっているのかを探る。

red を含む強意直喩表現の媒体には、*blood/ fire/ rose* のほか、*apple/cherry/lobster* などの語も入る。*blood/ fire/ rose* のN2を調査対象とするのは、EEBOにおいて最も頻度の高い媒体であるからである。コロケーションで“red as”右4語に現れる名詞を検索した。EEBOでの用例数は表2に示した通りである。

表2 EEBOにおける*red as N*の上位5位

直喩	頻度	直喩	頻度
1) <i>red as blood</i>	217	4) <i>red as cherry</i>	17
2) <i>red as fire</i>	47	5) <i>red as coral</i>	11
3) <i>red as rose</i>	46		

4節ではそれぞれの直喩について、いつ出現したフレーズであるのかを確認し、コーパスから得られた用例を観察して、どのような使用特徴が見られるかを検討する。

4. 3つの直喩の比較

4.1節では分析する3つの直喩と、*blood/fire/rose*の由来を押さえ、4.2節ではコーパスから採集したデータを提示する。

4.1 N2の語彙・強意直喩表現の出現

それぞれの直喩を比較する前に、*blood/fire/rose*の3語の出現した時期と、これらが強意直喩表現として使用され始めたのはいつかを確認する。それぞれの出現時期を図1に明示した。*The Oxford English Dictionary* (以下、*OED*)では、*blood*と*fire*はOEの初例があり、どちらもゲルマン語系である。*rose*もOEの初例があるが、ラテン語・フランス語からの借用である。

強意直喩の形で用いられ始めたのは、*blood*の場合は1275年の例が、*fire*は1325年の例が*OED*に記載されている。実際はより古く、*blood*の例は1200年以前に、*fire*は1300年頃にすでにあったことが示されている⁵。*rose*が強意直喩として使用される例は、OEの時代にすでにありとSvartengren(1918)は指摘している(1918:249)⁶。

*blood/fire/rose*の単語はそれぞれOEから存在しているが、強意直喩としては*red as rose*が最も歴史がある。*red as blood*と*red as fire*の直喩は、MEに入ってから現れ、両者の間には100年ほどの開きがある。

図1 *blood/fire/rose*の語彙・強意直喩出現時期 ※初出年は*OED*とSvartengren(1918)による。

Mod E	
1500	
ME	
1100	◦ <i>red as blood</i> 1275 ◦ <i>red as fire</i> 1325
OE	
700	- <i>blood</i> OE - <i>fire</i> OE ◦ <i>red as rose</i> OE - <i>rose</i> OE

⁵ c1275 (▶ ?a1200) *Laȝamon Brut* (Calig.) (1963) 7955 þe oder is milc-whit..þe oðer ræd alse blod [c1300 so read so blod]. / c1325 (▶ c1300) *Chron. Robert of Gloucester* (Calig.) l. 3179 Yfourmed as a dragon as red ase fur. (*OED*)

⁶ Svartengren(1918:249)に挙げられているOEの例は出典が示されていないが、*Blickling Homilies*からのものである。なお、この例は*OED*にも記載がある(OE *Blickling Homilies* 7 Seo readnes þære rosan lixep on þe [sc. the Virgin Mary]. (*OED*))

4.2 N1 と文脈

red as blood/ fire /rose について、それぞれ N1 と文脈を比較しながら、使用傾向を指摘する。

表 3 は EEBO から、表 4 は 19 世紀以降のコーパスから集めた 3 つの直喩の N1 の使用状況を表したものである。灰色に塗り潰した箇所は、その直喩において喩えられたものがあつたことを、白い箇所はなかったことを示している。

表 3、4 に設定した N1 のカテゴリーは「身体部位」、「人工物」、「自然物」、「無形/抽象概念」の 4 つである⁷。カテゴリー内の項目数が表 4 では少ないが、19 世紀以降の例が以前の例よりも少ないためである。表の中に斜線を引いたが、この斜線の上の語彙は EEBO と 19 世紀以降で共通して見られたものであり、斜線より下の語彙は EEBO、19 世紀以降のデータのどちらか一方だけに観察されたものである。

表 3 では、4 つのカテゴリー全てにおいて、*red as blood/ fire* が、*red as rose* は「無形/抽象概念」以外の 3 つのカテゴリーに使用されている。表 4 では、*red as blood* は「無形/抽象概念」以外の 3 つ、*red as fire* は「身体部位」と「自然物」の 2 つに、*red as rose* は「人工物」以外の 3 つの分類に見られる N1 を叙述する。

red as blood は時代を通して適用できる N1 が幅広く、カテゴリー内の項目を見ると白いセルの方が少ない。「身体部位」については、時代が降ると適用される N1 の減少が見られ、白いセルが多くなるが、これは近代の用例数の少なさが影響していると考えられ、今後白いセルの名詞が叙述対象となる例が観察される可能性がある。(2)は身体部位が N1 の例である。

(2)a. but lo the shame fast boye was dasht, and out of countenaunce cleane: he blusht as **red as blood**...
(EEBO/1565)⁸

b. where his thighes were fastned there the cullour was as **red as blood**...
(EEBO/1604)

強意直喩表現の N2 の語彙は、N1 と N2 の色以外の共通点、すなわち肌触りや温度といった質感の共通点にも注目した上で選ばれている。blood は液状であるため、液体の N1 が用例に見られる。これは時代を通して観察される。(3a)は “the oyll”, (3b)は “the vinegar”, (3c)は “wine”である。

(3)a. ...till the oyll haue gotten a colour as **red as blood**...
(EEBO/1559)

b. ...the vineger also wyl become so **red as blood**...
(EEBO/1576)

c. Rab looked at her glass, wine **red as blood**...
(BNC)

また、液体の N1 は人工物、自然物問わず見られる。上の例は人工物であり人間の手加えられている。次の例は自然物の例であり、N1 は “well”, “the sea” である。この他の自然物では、空や月食・日食の様子も *red as blood* が使われる。

(4) a. ...also in idumea is a well, that chaungeth colour foure times a yeare: for thre moneths it semeth troublous, as it were tempered with powder, thre months **red as blood**...
(EEBO/1582)

b. ...during the daytime it [= the sea]⁹ was as **red as blood**...
(Google Books/1880)

⁷ 身体部位名詞以外を英語表記にしていないのは、その他のカテゴリーにおいて実際に使用されている単語にそれぞればらつきがあるためである。例えば「動物」の場合 “horse”や “duck”などが実際の例で見られるが、表の見やすさを優先し、「動物」と表記した。また、*He blushed red as blood.* などのように 顔あるいは顔の部位を表す名詞が明示されていない例は、“face”の N1 として数えた。

⁸ 以下、コーパスからの用例の強調は筆者による。

⁹ 用例に角かっこ内で示す内容は筆者の注である。

表3 EEBO の N1 の使用

			N2						N2							
			blood	fire	rose				blood	fire	rose					
N1	身体部位	face				face										
		cheek				cheek										
		nose				nose										
		eyes				eyes										
		hair				hair										
		beard				beard										
		skin				flesh										
		visage				ears										
		thigh				hand										
	人工物	lips				cheek-bones										
							temple									
		鉄/製鉄所														
		刃														
		鎧														
		金貨														
		衣服/装身具				衣服/装身具										
		布製品				布製品										
		染料/薬液														
		燃える石														
	石炭															
	ガラス															
	飲料				飲料											
	食材				食材											
	文字															
	テーブル															
	手榴弾の火									建築材						
	自然物	動物				動物										
		血														
		花														
		川/海/泉														
		光														
		空														
		星														
		月/太陽			太陽のみ	太陽										
		宝石				宝石										
		果物				果物										
		穀物														
		体液														
		石/岩									石/岩					
		火									火					
							霧									
		無形/抽象概念	罪				季節									
	性格/感情															

表4 19世紀以降の N1 の使用

c. the easterne brow which erst was wan and pale, now in the dawning blusheth **red as blood**...
(EEBO/1593)

d. but in the first watch of the night the moon suffered an eclipse; and losing her brightness, became afterwards **red as blood**, and then waxed dim and dark...
(EEBO/1674)

「無形/抽象概念」の例での N1 は “sin” である。

- (5) ...so farre canst thou put this my grievous sinne from mee: which, though it be as **red as blood**, yea blood it selfe;

(EEBO/1626)

red as fire は *red as blood* よりも叙述対象の幅が狭く、その中でも集中しているのは身体部位の N1 である。EEBO では 47 例中 24 例、19 世紀以降では 43 例中 36 例が身体に使われている。そのうち顔色の描写が EEBO では 16 例、19 世紀以降では 28 例である。怒りや恥、焦りといった感情が赤面の原因となるのが主である。

- (6) a. ...at this reproch did phaton wax as **red as any fire**...

(EEBO/1567)

- b. the maiden nipt thus by the nose, straight blusht as **red as fire**: and with his girde displeased, thus she spake to hym in ire...

(EEBO/1577)

- c. she replied, whilst her glorious dark eye kindled, and her snowy temples got **red as fire**...she added, "you are the last man from whom I should have expected an insult."

(Google Books/1852)

- d. She gave a little scream, and turned as **red as fire**.

(Google Books/1869)

また、19 世紀以降の例では身体部位名詞が増加しており、EEBO の時点では 5 つの語彙のみであったが、*face/cheek/nose/eyes/hair/beard/ears/hand/cheek-bones/temple* という様々な N1 がある。

red as rose は、時代を通して 3 つのカテゴリの N1 にまたがって使われているが、カテゴリ内の下位分類や語彙は限定されている。最も用例が多いのは身体部位であり、EEBO では 46 例中 26 例、19 世紀以降では 30 例中 26 例ある。EEBO よりも近代の方が身体部位の例の占めている割合が大きい。これらの N1 には通時的に変化はないため、意味が固定化されていったと言える。

rose には「健康な顔色」という意味が 15 世紀ごろより存在する。(7)は *OED* での定義、この意味での使用例は(8)である。

- (7) IV. As a colour. 14. A fresh pink or ruddy hue of the complexion, esp. in the cheeks, regarded as a sign of health or vitality. Usually in *plural*.

(OED)

- (8)a. beauty there (whoeuer seeks) sits inthron'd vpon her cheeks, in a colour, **red as roses**...

(EEBO/1626)

- b. Her skin was as smooth as velvet; her cheeks as **red as a rose**; her lips like two cherries cheek by cheek

(Google Books/1830)

- c. He's slim and he's strait as the poplar tree, His cheeks are as **red as a rose**: looks like a squire of higher degree, When dressed in his Sunday clothes.

(Google Books/1818)

ここまで *red as blood/fire/rose* の 3 つの強意直喩表現の使用特徴を、N1 と文脈を中心にして取り上げた。3 つの強意直喩がどの N1 に使えるかは一様ではなく、*red as fire/rose* よりも *red as blood* の方が広範囲に使用できる。次節ではそれぞれ 3 つの強意直喩の特徴—*red as blood* の文脈と N1 の広さの理由、*red as fire* の身体部位語彙の増加の原因、*red as rose* が健康な血色を表す理由について考察する。

5 考察

5 節では、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の使用特徴が生じる理由について考察を行う。

5.1 *red as blood*

red as rose/fire と比較すると様々な N1 に使用できるのが *red as blood* の特徴である。なぜこの直喩が EEBO の時代と近現代を通じて最もよく使用されるのだろうか。

まず、キリスト教が言葉に影響している可能性が考えられる。*red as blood* の「無形/抽象概念」の N1 には罪があるが、*sin* が赤い(緋色)という記述には典拠があり、これは Isaiah 1:18 に見られる。*white* を用いた強意直喩表現も使用される箇所である。

(9) Come now, and let us reason together, saith the Lord: though your **sins be as scarlet**, they shall be as white as snow; though they be red like crimson, they shall be as wool.

(Isaiah 1:18)

また、EEBO の例には月食に *red as blood* が使用されているものがある。

(4)d. but in the first watch of the night the moon suffered an eclipse; and losing her brightness, became afterwards **red as blood**, and then waxed dim and dark...

(EEBO/1674)

Revelation で月食が起こる様も、*blood* に喩えられている。

(10) And I beheld when he had opened the sixth seal, and, lo, there was a great earthquake; and the sun became black as sackcloth of hair, and the moon became **as blood**;

(Revelation 6:12)

他に、ナイル川の水が血に変わる(Exodus 7:17-25)、ワインを契約の血と呼ぶ(Matthew 26:28, Mark 14:24, Luke 22:20)といった場面で *blood* は聖書に出現する。特に、ぶどう酒は契約の血であるという最後の晩餐でのイエスの言葉があるため、英語の *blood* は日本語の「血」に比べれば殺人や暴力といったイメージが強調されにくいと考えられる。*OED* の *blood* の項目には「命を維持するもの、生命」という意味がある。

(11)I. 4. Blood regarded as the fluid which sustains life, lifeblood; (hence) the vital principle, that upon which life depends; (metonymically) life, lives.

(OED)

また、この定義での初例は(12)で聖書からの引用であり、ラテン語の注釈がつけられている。

(12) OE West Saxon Gospels: Matt. (Corpus Cambr.) xxvii. 4 Ic syngode þa ic sealde þæt rihtwise blod [L. *sanguinem iustum*].

(OED)

ラテン語の “*sanguinem*” が “*blod*” に当たるが、これが語源になった英語での *sanguine* は、「紅色の、血の」という意味とともに「快活な、陽気な、楽天的な(*cheerful*)」の意味がある¹⁰。このような言葉も *red as blood* の直喩表現に影響して、*red as blood* が様々な N1 に用いられる素地を作っていると考えられる。

また、高頻度の直喩という側面に着目して、この *red as blood* を分析する必要があるだろう。色彩語を含む強意直喩表現は、それぞれの色彩語においてもっとも頻度の高い N2 と、2 番目に高頻度の N2 との間には用例数に開きが出る傾向がある。それが最も顕著なのは the Corpus of Contemporary American English(COCA)のコーパスである。表 5 は COCA で *white/black/red as* に続く名詞を検索(コロケーションで右 4 語)したもので、それぞれ上位 5 語の名詞と頻度を示している。

¹⁰ 『ジーニアス英和大辞典』参照。

表 5 *white/black/red as* に続く N2 の頻度(COCA)

<i>white</i>	<i>black</i>	<i>red</i>
snow 186	night 104	blood 64
sheet 105	coal 44	hair 16
ghost 53	pitch 27	fire 13
bone 23	ink 20	beet 14
paper 22	midnight 19	rose 12

white の強意直喩表現の場合は、1 位の *snow* と 2 位の *sheet* の間に 81 例、*black* の場合は *night* と *coal* の間に 60 例、*red* では *blood* と *hair* の間に 48 例の差がある。つまり、色彩語を含む強意直喩表現の N2 は、ひとつの名詞に集中しやすい傾向がある。

white as snow も *red as blood* と同様に、様々な文脈に現れる強意直喩表現である。*white as snow* の用例の中には、(13)のように、*snow* の特徴が際立っていると判断しにくいもの、つまり *white* という色が中心的な情報であり、雪のもつ冷たさや冬らしさが生かされていないものがある。

(13) If these men stay here much longer my hair will be **white as snow**.

(HUM19UK)

N2 の特徴が捨象されるという現象が高頻度語に共通して見られるならば、強意直喩表現と色彩語メタファーの性質についての示唆となる。紙幅の関係上、この問題点は別稿にて扱うこととする。

5.2 *red as fire*

red as fire は、激しい感情を感じる場面で身体部位に使用される例が EEBO と近代のコーパスで見られ、さらに、身体部位の語彙が近代になって多様化するという現象が見られた。この多様化は *fire* という N2 にどう着目するかが時代を経て変わった結果生じたと考えられる。すなわち、EEBO の時代には激しいものとしての *fire* が、19 世紀以降は熱いものとしての *fire* という側面が生かされている。

EEBO の例では、睨む目と “*Four horses fierce*” の N1 の例が見られる。(14a)の媒体 *fire* は (15) に示した OED での *fire* の定義が含まれていると考えられる。睨んでいる様が激しいために、激しさの象徴である *fire* が媒体として選ばれている。(14b)の例は動物の N1 であるため、*red* という情報は主に毛皮の色を指すと推測されるが、*fierce* な馬であるため、それとイメージが合致する *fire* が N2 に選択されていると考えられる。

(14)a. with a furious looke he star'd, with eies enfiar'd as **red as any fire**

(EEBO/1614)

b. Four horses fierce, as **red as flaming fire**...

(EEBO/1607)

(15) 15. Reddening of the face or flashing of the eyes, esp. as a sign of strong emotion or animation; an instance of this.

(OED)

19 世紀以降の例では、熱さの典型としての *fire* がより顕著と言える。EEBO の時代にもこの観点が反映された例があるが近代の *red as fire* は身体部位に、より安定して使用されており、身体部位の持ち主の感覚により近い描写がなされていると捉えられる。*as hot as fire* という直喩表現、“*He was burning with fever.*” “*My cheeks burned with shame.*” などのメタファーが存在するように、*fire* が熱いという認識は、他の 2 つの直喩—*red as blood*, *red as rose*—よりも際立っているため重要である。怒りや焦りなどを感じた際に体が熱くなるという身体基盤によりメタファーは生まれる。¹¹ 強意直喩表現は文学テキストに頻繁に用いられるが、熱さを感じる体の箇所を文中で細かく指定することで、その場面の興奮と感情を読者に効果的に伝達するという書き手の意図が、N1 の語彙増加に影響したのではないかと考えられる。

¹¹ 身体部位名詞の増加と身体基盤の関連については、大森文子教授のご教示による。

5.3 red as rose

red as rose は主に健康な顔色を表す際に用いられることを 4 節で確認した。ローズという色について福田(2017)は「欧米諸言語におけるローズという色名は、花の名からとられた色名としてはおそらく最古のものである。古代ギリシアの詩人ホメロスが曙の空を形容し」と述べている(2017:38)。EEBO にも昇る太陽の N1 の例があるが、近代になるにつれて、頬の色に使うのが優勢となる。*lips* に *red as rose* が使用される例もあるが、なぜ *cheeks* の N1 に用いるのが定着していくのだろうか。これは血色・バラともに複数の側面が認識されることが影響しているだろう。

rose が媒体として現れる強意直喩表現 *fresh as a rose* が OED の形容詞 *fresh* の項目で挙げられている。

(16)P1. In similes and comparisons suggesting newness, vitality, etc., such as *fresh as a daisy*, *fresh as paint*, *fresh as a rose*, etc.

(OED)

vitality は頬の血色とも関連する概念であるため、*rose* という N2 が頬に使用されると考えられる。しかし、同時に *rose* は *transience* をも表す。*rose* の比喩義の一つには(17)の意味が見られる。

(17) II. In allusive, emblematic, or figurative uses. 4. a. A rose as distinguished by or emblematic of surpassing beauty, fragrance, purity, or rich (esp. red) colour (often in similitive use); frequently also with implication of transience. Cf. sense A. 5 and *fresh as a rose* at *FRESH adj.*, *n.*¹, and *adv.* Phrases 1; *red as a rose* at *RED adj.* and *n.* Phrases 1.

(OED)

つまり、美しさや香り、純潔さ、色において優れているものというイメージがバラにあり、また、儚さの含意があると説明がされている。人の顔色は一定ではなく、環境や感情によって紅潮したり、蒼白になったりする。色彩語、あるいは色彩語を含む直喩表現が使用される文脈では、顔色の対比がしばしば行われ、人間の顔色の不安定さがわかる。

(18)a. he waxe rede as a rose / &; after becam pale &; dede as ashes...

(EEBO/1477)

b. then collour comes and goes, some tyme as pale as earth i looke, some tyme as red as rose

(EEBO/1563)

c. "Nothing!" she says, faintly, turning first milk-white, then red as a rose in her burning prime.

(HUM19UK)

頬の血色は活力や美しさの証であるが、状況によっては消えてしまうものである。バラも同様の特徴をもつため、*red as rose* の主な N1 は顔色であるという使用傾向が生じていると言える。

5.4 考察のまとめ

4 節と 5 節で *red as blood/fire/rose* の強意直喩表現の使用傾向を、N1 をもとに整理し、使用傾向の生じた原因について分析を行った。*red as blood* は叙述対象となる言葉が豊富であるという特徴が見られた。これについては聖書、*blood* 以外の血に関連する語彙からの影響を指摘した。また、*red* を含む強意直喩表現の中では高頻度であるという点を踏まえ、*white as snow* に起こったように、*blood* の特徴が捨象されているために、幅広い N1 に用いられるという主張を行った。*red as fire* については、近代以降の身体部位の語彙が多様に見られる点について考察した。激しさの象徴としての *fire* が EEBO では顕著であり、その後熱さを表すものとしての *fire* に着眼点が移動したために、身体部位語彙が広まったと考えられる。*red as rose* は健康な血色を表すという特徴があり、なぜ “face” “cheeks” の N1 が *rose* という N2 をとるのかについて分析した。人間の顔色は一定ではないため常に血色があるわけではないという点が *rose* と類似していると言える。*rose* は美しさ、生き生きしたものであるが、儚さをも表す。美しい赤さは簡単に消えて蒼白になるために、*rose* という媒体が選択されていると考えられる。

6. 結論と課題

本稿では *red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の 3 つの強意直喩表現を比較し、使用特徴について考察をした。直喩の研究において、N1 が注目されていない点、慣用化した直喩は N2 の認識が現代と異なる可能性を踏まえ、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の叙述対象と使用文脈を中心にして用例を観察し、3 つの強意直喩表現それぞれの特徴を指摘した。*red as blood* は使用できる N1 が幅広く、これは聖書の言葉と、*blood* に関連する意味をもつ語彙が原因の一つと考えられる。また、*red* を含む強意直喩の中では、*red as blood* が最も頻度が高く、これも *blood* の認識に関連していることを論じた。*red as fire* は、感情の昂りにより顔が赤くなるという文脈に使用される。また、近代以降の例では N1 の身体部位の名詞が豊富になり、この理由について分析した。*fire* の激しさから *fire* の熱さに注目する点が変わったという主張を行い、また、文学作品で描写する際に、身体部位を指定し、その場所と温度・感情を関連づけることで読者に臨場感を与えるという考察をした。*red as rose* は顔の健康な赤みを表すのが主な使用であり、これは近代の例ほど顕著であった。*red as rose* がきれいな血色を表すという特徴は、その血色の消えやすさとも繋がっている。血色とバラの間には、決して安定したものではないという類似点があることを、顔色の対比を行った例と *OED* の *rose* のもつ比喩義を提示して示した。

強意直喩表現の高頻度の N2 がどう認識されているかは今後詳細に論じる必要がある。*white as snow* と *red as blood*、その他の色の直喩について、N2 の特徴の捨象を分析するために使用傾向を観察するのが課題の一つである。また、*red as fire* の認識の変化については、*fire* の激しさと *fire* の熱さという 2 つの側面を挙げたが、両者はどう異なるのか議論を深めなければならない。*red as rose* についても、*cheeks* の他の身体部位、特に、赤さが強調される身体部位の *lips* との比較や、美しい白さとも関連させて今後分析をしていく。

参考文献

- Berlin, B. & P. Kay. (1969). *Basic Color Terms, their universality and evolution*. Berkley: University of California Press.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. & M. Turner. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lindquist, H. (2009). *Corpus linguistics and the description of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳(2016). 『英語コーパスを活用した言語研究』. 東京: 大修館書店.)
- Moon, R. (2008). “Conventionalized as-similes in English: A problem case”. *International Journal of Corpus Linguistics*. 13(1), 3-37.
- Norrick, N. (1986). “Stock similes”. *Journal of Literary Semantics*, XV(1), 39-52.
- Richards, I. A. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford: Oxford University Press.
- Svartengren, T. H. (1918). *Intensifying Similes in English*. Lund: Gleerupska.
- Tartakovsky, R., Fishelov, D., & Y. Shen. (2019). “Not as clear as day: On irony, humor, and poeticity in the closed simile,” *Metaphor and Symbol*, 34(3), 185-196.
- Trim, R. (2011). *Metaphor and the historical evolution of conceptual mapping*. London: Palgrave Macmillan.
- de Vries, A. (1974). *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam and London: North-Holland Publishing Company. (山下主一郎ほか訳(1984). 『イメージ・シンボル事典』. 東京: 大修館書店)
- Wyler, S. (1992). *Colour and Language: Colour Terms in English*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- 菊地礼(2022). 「直喩による程度表現の働き」. 『表現研究』. 第 115 号, 14-23.
- 久野愛. (2021). 『視覚化する味覚—色を彩る資本主義』. 東京: 岩波書店.
- 須賀川誠三. (1999). 『英語色彩語の意味と比喩—歴史的研究』. 東京: 成美堂.
- 瀬戸賢一. (1997). 『認識のレトリック』. 東京: 海鳴社.

- 竹森ありさ. (2022). 「色彩語 white を含む強意直喩表現の分析—*white as snow/ a sheet/ marble* の比較—」『英語のレトリック・日本語のレトリック(言語文化共同プロジェクト 2021)』.(大森文子編集).大阪大学大学院言語文化研究科, 43-53.
- 新妻明子. (2013) 「心的状態を表す英語の色彩語メタファー：認知意味論に基づく意味拡張のプロセス」.『常葉大学短期大学部紀要』第 44 号, 47-62.
- 福田邦夫 . (1994). 『ヨーロッパの伝統色—色の小辞典』.東京：読売新聞社.
- . (1999). 『色の名前はどこからきたか—その意味と文化』 東京：青娥書房.
- . (2017). 『色の名前事典 507 』. 東京：主婦の友社.
- 吉村耕治. (1997). 「中期英語の色彩表現の曖昧性」.『英語青年』. 142(10), 550-554.
- 渡辺秀樹. (2005). 「強意的頭韻直喩 "as dead as a/the dodo" の発達と異種」.『言語文化研究』, 第 31 号, 163-186.

辞書・コーパス・Web サイト

- 『ジーニアス英和大辞典』 KONISHI Tomoshichi, MINAMIDE Kosei and Taishukan, 2001 -2011
The Oxford English Dictionary. Oxford University Press, March 2023. (<https://www.oed.com>)
- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Davies, Mark. (2004) *British National Corpus* (from Oxford University Press). Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/>.
- Davies, Mark. (2017) *Early English Books Online Corpus*. Available online at <https://www.english-corpora.org/eebo/>.
- Google Books. (<https://www.english-corpora.org/googlebooks/>)
- HUM19UK, Version 1. (2019). University of Huddersfield, Utrecht University, University College Roosevelt, Middelburg. (<https://www.linguisticsathuddersfield.com/hum19uk-corpus>)
- Bible Gateway <https://www.biblegateway.com>

サイト最終閲覧日 2023 年 4 月 30 日